第 32 回
歯科保健医療国際協力協議会
学術集会　抄録集

The 32nd Annual Meeting of Japan Association of International Cooperation for Oral Health

コロナ禍からコロナ後の
歯科保健医療国際協力活動の展望

2022 年 7 月 3 日 (日)

＜開催にあたって＞

新型コロナウイルス感染症の流行から２年が経過しました。この間、国際的な人の物理的な交流が停止される一方、オンラインでの交流も生まれるようになりました。医療や教育にもオンライン化の波が押し寄せました。

予期せぬ形での時代の転換があり、しかし私たちはその時代の中で生きていかなくてはなりません。コロナ禍での抑制的な生活は、感染症を抑える一方で、仕事を失った人々の貧困、食事が満足にできずに体重減少の報じられる子どもたちの出現、全年齢の女性を若い男性を中心にした自殺の急増など現在進行形で別の問題も引き起こしています。

コロナ禍で何を重視するか、長期化する中で現れてきた世代や集団での関心事の違いは、社会的な要因を左右し、貧困や自殺のリスクを特定の人々に集積させていきます。

国際保健は、このような社会的な要因による健康の格差を是正するための取り組みです。今回の大会では、この厳しい状況の中にあっても活動を続ける方々に、コロナ禍で考えたことや今後の展望についてお話をいただきます。オンライン開催をいかし、個別に意見交換を行う場も設けました。今回の集会を久しく会わない懐かしい面々と語らう場に、また初めて会う人から刺激を受ける場にしていただくことができましたら望外の喜びです。

第３２回大会長

東京医科歯科大学　相田潤

＜２０２２年７月３日　プログラム＞

13:00-13:10　開会のあいさつ・趣旨説明

13:10-15:00　シンポジウム　コロナ禍での活動や考えたことや、コロナ後の展望

根木　規予子（ネパール歯科医療協力会）
志賀　千尋　（HAPPY TOOTH PROJECT）
滝波　修一　（NPO ジョロナ）
夏目　長門　（愛知学院大学）
河村　康二　（南太平洋医療隊・河村歯科医院）

（15 分発表＋
質疑応答 5 分）

15:00-15:10　休憩

15:10-15:30　オンライン交流セッション（グループセッション）

５名の発表者の部屋（ブレークアウトルーム）を選択、自由な意見交換を行なってください。フィードバックセッションの発表者を決めてください。

15:35-16:05　フィードバックセッション

各グループから５分、感想などを発表してください。

16: 15　閉会

集会はオンライン開催となります。下記 Zoom にお入りください。

https://zoom.us/j/91511007064
ミーティング ID: 915 1100 7064 パスコード: 931553

※役員会は 10 時より総会は 11 時よりオンラインにて別途行います。

コメントの追加 [ME1]: あえて不要かもしれません。

＜抄録集＞

ネパールにおけるコロナ禍の下での活動

ネパール歯科保健医療協力会

〇根木規予子　白田千代子　深井穫博　中村修一

ネパール歯科保健医療協力会は 1989 年より、2020 年 1 月までの間に 32 回の現地活動を行ってきた。特に近年はネパール人の自立支援活動として、現地口腔保健専門家(COHW)養成事業を重点的に行ってきたが、COVID-19 の蔓延により、2020 年度以降現在に至るまで、全ての現地への派遣活動は中止となった。現地ではロックダウンとなり学校は閉鎖、COHW の活動も大きな困難に見舞われた。しかし、このような状況下において、オンラインによる会議と COHW 養成研修会を定期的に開催した。COHW が自ら立案した COVID-19 の予防と健康・口腔保健啓発ポスターを作成し、それを用いた住民への啓発とその評価が行われた。現地自治体であるゴダワリ市を通じ、村や学校にポスターを掲示するなど村人の健康向上に寄与した。

今後は学校保健、フッ化物洗口、母子保健および高齢者保健事業の再開に向けその必要性と運営管理強化を行っていく必要がある。現地での対面が実現するまでは日ネ双方のモチベーションの維持を図る必要もある。これまでのコロナ禍の下での活動について報告する。

コロナ禍からコロナ後の歯科保健医療国際協力活動の展望

HAPPY TOOTH PROJECT 責任者
日本歯科大学東京短期大学非常勤講師
志賀千尋

２０１４年、モンゴル国ウランバートルに開設された、小児がん治療センターの周術期口腔機能管理アドバイザーを、京都大学大学院医学研究科上久保靖彦教授から依頼されたことがきっかけでモンゴルとのご縁ができました。２０１５年にはウランバートル市内の基幹病院、歯科診療所１５箇所を訪問し、所得による医療受診環境の差やう蝕を放置したことにより蜂窩織炎で命を落とす子どもが存在することを知り、「むし歯で亡くなる子どもをなくそうプロジェクト」HAPPY TOOTH PROJECT を立ち上げた次第です。

２０１６年、２０１７年の活動は、モンゴル国歯科医師免許を取得し、歯科治療を行いました。日本人歯科医師による日本製の歯科材料を使用した治療は大盛況で、早朝から大勢の治療希望者が殺到しました（合計６４１人）。我々も一定の達成感を得る一方で、短期滞在では継続した治療を行えないことから、治療以外の方法を模索していくことになりました。

２０１８年は口腔衛生指導を行うプロジェクトを開催しましたが、会場に訪れたのはわずか２５人で、モンゴル人の予防に対する意識の低さを露呈する形となりました。子どもが多いモンゴルでは、小学校が二部制になっており、午前１１時頃に来校する後半組は夜型の生活でう蝕のリスクが高いことが判明しました。しかし、孤児院では、市中の子どもたちよりう蝕が少なく、改めてう蝕が生活習慣病であり、予防の大切さを啓蒙していくには歯科衛生士の活躍が必要不可欠と再認識した次第です。

２０１９年、日本歯科大学東京短期大学とモンゴル医療科学大学歯学部衛生士学科との間で、クリニカルトレーニングプログラムを締結しました。モンゴル医療科学大学衛生士学科に在籍する学生はわずか１０名で教科書やシラバスもなく、教員自身も歯科衛生士の職務について把握していない様子でした。初年度は双方にとって実りある交流になったことは言うまでもありません。

さあ、これから、というところでコロナ禍となり、この２年半は何ら進捗のないままプロジェクトを中断せざるを得ない状況にあります。トライアンドエラーを繰り返すなかで、エラーが出たときに新たな発見があり、モンゴルの人たちが当たり前に思ってい

るところに疑問を抱く、これはやはり現地に出向かないと感じることが出来ないように思います。しかし、教育、知識の共有（ハンズオンコース等）はリモートで対応可能のように思いますし、oVice のようなリアルとバーチャルを繋ぐ空間において、アバターで参加してもらい、様々な職業体験をしていただく、そういう場の提供も検討中です。

海外での事業遂行にあたっての阻害因子

NPO ジョロナ

滝波修一

バングラデシュでの JICA 草の根事業実施に際しての発端、事前準備、実施、次の事業への準備、事業再開について紹介する。

そこで想定内・想定外の事業遂行を阻害する事象が発生したので、討論の素材として供覧する。

第 1 期の事業実施は手探りだったが、結果は想定以上の成果であり、更なる問題点として「口腔衛生指導の専門医」の必要性が明らかになった。

第 2 期はスタートからテロ事件で開始が 2 年遅れ、コロナ禍で 2 年弱の中断にみまわれた。しかし「禍を転じて福と為す」のとおり、啓発教材や事業内容のバージョンアップを考え、準備が出来た。

テロ事件、コロナ禍の様な事態の他に、多くの事業遂行を阻害する事象についてのご意見をお願いいたします。

国際協力とコロナウイルスパンデミックについて

歯科保健医療国際協力協議会　会長
愛知学院大学歯学部口腔先天異常学研究室　教授
愛知学院大学歯学部附属病院口唇口蓋裂センター　部長
愛知学院大学歯学部附属病院口腔ケア外来　科長
愛知学院大学歯学部附属病院言語・口腔機能発達外来　科長
一般社団法人日本口腔ケア学会　理事長
特定非営利活動法人日本口唇口蓋裂協会　常務理事
特定非営利活動法人日本医学歯学情報機構　事務局長
国際口腔ケア学会　事務局長
国際口唇口蓋裂協会　議長
夏目　長門

武漢で発生したコロナウイルのスパンデミックは、第二次世界大戦以降で最も大きな災いであると言われています。多くの方が亡くなり、仕事を失い、人類に大きな環境の変化をもたらしています。

そのような中で、関係する組織においてコロナ禍でいくつかの対応をしたので概要を報告します。

１．愛知学院大学歯学部附属病院での取り組み

愛知学院大学歯学部附属病院では、コロナ禍での感染対策として、一時期は緊急以外の手術の中止や外来が閉鎖されました。この中で先天異常の治療はコロナ禍では優先順位が低いため、患児と家族は大きな不安がありました。そこで、15 年前から国際協力として海外に在住する口唇口蓋裂の子どもたちのために開発した Telepractice(遠隔言語訓練システム)を国内で応用できないかと考え、病院の臨床部長会で提案し許可を得て対象患者の中で希望するすべての方に無料で実施しました。患者家族の使用機材は、パソコン、スマートフォン、ipad を応用しました。

この対応は非常に有用で、多くの患者家族から感謝の言葉をいただきました。その後、九州大学等からもこのシステムについて問い合わせがあり、技術移転も行いました。

また、この成果を第 61 回日本先天異常学会学術集会で発表し、優秀演題賞を受賞しました。

これまでの私たちの国際協力の取り組みがコロナ禍で国内の患者に応用できた例の一つとして、今後もこのようなことを継続したいと考えています。

2．一般社団法人日本口腔ケア学会での取り組み

日本口腔ケア学会は、現在準会員も含め 9500 名以上の方々により構成され、年間 20 回ほどの認定試験を行っており 500 名ほどの方が受験していましたが、コロナ禍で認定試験を実施できない状況に陥りました。

若い医療者（会員）への学びの機会を無くしてはいけないと考え、急遽これまでの国際協力の経験を基に CBT システム（Computer Based Testing）のインフラを整備し、全国 300 か所でお正月やお盆を除く毎日受験することができるシステムを緊急で立ち上げ、今では筆記試験と並行して全国 300 か所で毎日 CBT にて受験することが可能となりました。

これは医療分野では初めて行ったものであり、令和 3 年度は 628 名と過去最高の受験者を確保することができました。

また、日本口腔ケア学会国際協力委員会ではベトナムに在住している日本人歯科医師幾島章仁先生（日本口腔ケア学会評議員・国際協力員）を通じて南部メコンデルタのチャビン省において約 9000 名の小学校の歯科検診を行いました。

このように、コロナ禍で日本人専門家が短期間での両国の移動は困難でも長期に滞在している日本人専門家と協力することにより、現地での活動を継続して実施することができました。

3．国際口腔ケア学会の取り組み

私が事務局長を拝命している国際口腔ケア学会（理事長　星　和人・東京大学医学部教授）は日本からの国際貢献として、日本口腔ケア学会を母体として令和 3 年 4 月に設立されました。コロナ禍であることを鑑みて、外国人はすべて無料で WEB にて参加が可能なシステムとして計画しました。これは単に海外の医療者が恩恵を受けるのではなく、国内の歯科衛生士や学生もわずかな負担金で海外の学会に参加し発表ができるもので、国内の方に海外からの情報提供することも容易となりました。現在、既に 8724 名の会員を擁して、日本からの口腔ケアに関する情報を無償で発信しています。

4．国際口唇口蓋裂協会の取り組みについて

国際口唇口蓋裂協会（ICPF）は 2020 年にロシアのサンクトペテルブルクにて学会開催を予定していましたが、コロナ禍で 2 年間開催できませんでした。しかし、2022 年 4 月には大阪にてハイブリッドで開催できました。コロナのみならずロシアのウクライナ侵攻により大きな国際問題がありますが、ロシアの医療者との協力関係を維持しつつ学会の開催を他国で実施することにより開催できました。
今回の成功体験に基づき、今後はコロナの状況を問わず可能ならばハイブリッドによる開催を継続して海外からの参加者を増やして実施する予定としています。

5．日本医学歯学情報機構の取り組みについて
日本医学歯学情報機構では、海外に赴いての医療協力が困難であるため、外務省日本 NGO 連携無償資金協力「ベトナム社会主義共和国への医師・歯科医師国家試験創設支援事業」に申請し、予算を得ることができました。
これにより、コロナ禍においても日本人が渡航せずに WEB 等によりベトナムでの国家試験導入をサポートすることにより、すべての国民に医療の質を高めことによって貢献できるものと考えています。

6．日本口唇口蓋裂協会の取り組みについて
日本口唇口蓋裂協会では、コロナ禍により海外に専門家の派遣を行うことはできませんでした。このため、その予算を再配分して継続的にベトナム、モンゴルよりの留学生を受け入れ、日本での技術移転や教育を施しています。本年度はベトナム人 3 名、モンゴル人 4 名受け入れます。

7．歯科保健医療国際協力協議会の取り組みについて
私は昨年 7 月に歯科保健医療国際協力協議会会長を拝命いたしましたが、コロナ禍で一昨年は総会すら開催できない状況でした。
昨年 7 月以降セミナー等は開催できませんでした。過去の資料を確認して会員の名簿管理や会費請求や新たな会員の募集を行い、2000 年以降で最高の 50 名の方に本会に入会して頂きました。
また従来より、本会名の和文、英文には矛盾があるとの指摘がありましたので、会員全員に意向を確認して 100%の方の賛同は得られませんでしたが、86.9%の方が執行部案に賛成して頂きました。

コロナ禍での活動や考えたことや、コロナ後の展望

南太平洋医療隊　河村歯科医院

河村康二

2020 年 1 月 15 日、日本国内で初めての COVID19 の感染者が報告された。その後、日常生活は一変し、外出を控え、会合や友人との対面での会話すら皆無となった。当然ながら私の主たる海外ボランティア活動を行うトンガ王国への訪問も出来なくなった。現在、第 6 波は減少傾向に推移し、高齢者などへの 4 回目のワクチン接種が始まったことで、重症化は限定的になると予測しているも、新たな変異株の出現や海外からの入国者への緩和策がとられている今、先は見通せない。

自身の対策は無論のこと、河村歯科医院内での院内感染予防、最大限の対策が中心となる生活が続いた。また、日本在住の外国籍で保険証がなく医療の恩恵を受けられない方への歯科診療を行ってきた。そんな中で 2022 年 1 月 15 日未明、トンガ王国の海底火山で起きた大規模な噴火及び津波によりトンガ王国全土が被災した。世界はグローバル化が進んでいるが、地球温暖化の問題、独裁的傾向の強い専制主義指導者の台頭、ウクライナへのロシアによる侵攻と殺戮が民主主義に危機をもたらすなど、私達を取り囲む環境は問題山積である。

1966 年、歯学部在学中、無歯科医村問題研究会を発展的に解消し医療保障研究会を立ち上げ、理念として「すべての人々へ平等で質の高い歯科医療を提供する」ために不断にどうするべきかを考えて今日まで歯科医師の立場から実践してきた。このコロナ禍での河村歯科医院の診療、国内ボランティ活動、トンガ王国被災に対する活動、地球温

暖化やウクライナでの侵攻等で自分に出来た事をお話しし、COVID19 後、どうしていけば良いのか皆様と考えていきたい。